

## 1 大雪山国立公園の概況

### (1) 大雪山国立公園の概況

#### ア 地理・地形

本公園は、北海道の中央部に位置し、226,764haの面積を有する日本最大の山岳公園である。お鉢カルデラを形成する大雪火山群、活火山の十勝岳を主峰とする十勝岳連峰、然別湖周辺の然別火山群及び日高系の古成層からなる石狩岳連峰を包含しており、特徴的なものとして火山活動に起因する地形（柱状節理・カルデラ・泥火山等）や寒冷地の地形・地質現象（周氷河地形・永久凍土・構造土等）がみられる。山頂部の標高は2,000m程度であるが高緯度に位置していることから本州の3,000mクラスの山岳に匹敵する環境であり、公園内の随所に滝、峡谷、雪渓、雪田、函などの興味深い地形が存在している。また、公園内には天然湖である然別湖や人造湖である大雪湖、糠平湖があるほか、各所に温泉が湧出している。

#### イ 気象条件

本公園は、北海道でも最も寒さの厳しい内陸性の寒冷地帯に位置している。年平均気温がマイナスとなる地帯も多く、山頂部では夏でも雪渓や雪田がみられ、各所に永久凍土層が存在するなど、国内でも特異な自然環境となっている。山頂部では夏季が約2ヶ月間と短く、紅葉の訪れは9月初～中旬と日本で最も早い。

#### ウ 植生

植生は、山麓部では広大な森林帯が分布し低標高から針広混交林帯、針葉樹林帯、ダケカンバ帯の垂直分布がみられ、特に針広混交林帯は世界的にみても優れた景観を呈している。標高が高くなるに従い、森林限界、ハイマツ帯へと推移し、山頂部付近では草本類を主体とした高山植物群落を形成し、これらの中には希少種や固有種が多数存在する。また、高原の湿地帯には典型的な高層湿原が広がっており、湿原特有の植物やわい性化したアカエゾマツ等がみられる。

#### エ 動物

本公園内にはエゾクロテン、エゾオコジョ、エゾシマリス、エゾリス、エゾモモンガ、エゾナキウサギ等の中小型ほ乳類が多数生息しているほか、大型ほ乳類のエゾヒグマやエゾシカが生息する。また、クマゲラ、ミユビゲラ、シマフクロウ、キンメフクロウ等の希少種を含む多種の鳥類や、オショロコマ、ミヤベイワナ等固有種・希少種を含む魚類、ウスバキチョウ、アサヒヒョウモン等の高山蝶など昆虫類も多種生息している。

#### オ 利用環境

冬季の気象条件が厳しいため本公園の利用の時期には偏りがみられ、利用の大半は短い夏季から秋季に集中するのが特徴である。中でも、交通の要衝に位置している層雲峡では比較的利

用が多いものの、利用拠点の中には冬季に道路が閉鎖される箇所もある。本公園へのアクセスは、公共交通機関によるものは少なく、マイカーや団体ツアーバスによるものが主である。主な利用形態は、登山、高山植物観賞や峡谷沿いの自然探勝、温泉を利用した保養等であり、山岳部では山小屋等の宿泊施設が少ないため日帰り利用が大半を占める。また、山麓部の利用拠点は北海道周遊観光ルートの拠点としての利用も多くみられる。

## カ 社会条件

本公園の面積 226,764ha の内訳は、国有林 213,580ha、その他国有地 886ha（うち、環境省所管地 78ha）、公有地 10,198ha、私有地 2,099ha で、ほとんどが国有地及び公有地となっており（99.1%）、私有地の占める割合はわずか 0.9%にすぎない。

公園を包含する関係市町は上川支庁及び十勝支庁の 2 支庁、1 市 9 町（富良野市、上川町、東川町、美瑛町、新得町、上富良野町、南富良野町、士幌町、上士幌町、鹿追町）にまたがっているが、公園内の定住人口はわずか、集団施設地区等利用拠点に限られている。

本公園の年間利用者数は約 610 万人（平成 16 年度）であるが、本公園には北海道の中央部を横断する国道 39 号線が通過しているため、北海道周遊観光ルートの主要地点に当たる層雲峡の利用者が多くなっている。